

崖の上で踊る

石持浅海

第二回

第一章 作戦開始（承前）

フウジンW P 1。

家庭用の高効率風力発電機。株式会社フウジンブレードのヒット作だ。マンションのベランダにも簡単に取り付けられ、電気代の負担を減らす。構造が簡単だから安価で、初期投資を簡単に回収できる。太陽電池のように広い面積も必要としない。集合住宅でも使えるから、一気にユーザーを増やした。

高効率の秘密は、実はフウジンブレード単独の技術ではない。フライホイール最大手のソル電機が技術協力したから可能となったと

いうことだ。開発部隊にいた一橋が明言したのだから、間違いないだろう。

しかし社長の中道は、いかにも自社の独自技術のようにアピールした。中道は、その手の情報操作に長けていた。おかげで新興企業向けの株式市場で、フウジンブレードの株価は上がり続けている。

絵麻がフウジンWP1を購入したわけではなかった。アパートに一人暮らしだから、わざわざ風力発電機を買ってまで電気代を節約したいとは考えていなかった。というか、そもそも家庭用風力発電機という存在自体を知らなかった。

風力発電機を導入したのは、隣家だ。隣の一軒家が、二階のベランダにフウジンWP1を据え付けたのだ。絵麻の部屋のすぐ傍に。偏頭痛に悩まされるようになったのは、それからだ。

それまで頭痛などと無縁な生活を送ってきた絵麻は、突然の異変に戸惑うばかりだった。病院に何軒行っても、原因はわからないと言われるだけ。仕事の能率も上がらなくなり、職場では白い目で見られるようになった。誰にも相談できず、絵麻は次第に追い詰められていった。

原因に思い至ったのは、絵麻の手柄ではない。きっかけは電車の中吊り広告だ。週刊誌の広告に、有名俳優の不倫を報じる記事の見出しが載っていた。好きな俳優だったから、会社帰りに書店に立ち

寄って、件の週刊誌をばらばらとめくってみた。そうしたら目的の
記事の次ページが目に入ったのだ。そこには『エコの落とし穴。風
力発電が危ない』という見出しが躍っていた。

記事によると、自然エネルギー活用のお題目の下に、全国に大型
な風力発電機が設置されているらしい。風力で発電するのだから、
石炭も石油も原子力も要らない。これ以上ないくらい都合のいい発
電方法だけれど、実はトラブルが起きているのだという。野鳥がプ
ロペラの羽根に当たって死んでしまうといった問題の他に、最近注
目されてきた問題として、羽に風が当たるときや発電するときに発
生する低周波騒音が、周辺住民に被害を与えていると記事には書か
れてあった。

どきりとした。記事にあるような大型ではないけれど、自分の身
近にも風力発電機がある。帰ってアパートの窓を開けて、目の前の
風力発電機に書いてある型番をメモした。そして型番をインターネ
ットで検索したら、フウジンWP1の低周波騒音に悩まされている
人たちの声がヒットした。

悩み多き人が新興宗教にはまるのはこんなパターンかなと思いつ
つ、絵麻は被害者の会の門を叩いた。はたしてそこには、絵麻と同
じ症状で苦しむ人たちが集っていた。

諏訪沙月。

あまもりゆうた
雨森勇大。

同じ症状を抱えたために、息子が自殺してしまった江角孝人もいた。
えすみたかひと

彼らを含む多くの被害者は弁護士と協議して、フウジンWP1の製造元であるフウジンブレード社を相手取って訴訟を起こした。内容は、フウジンWP1の販売停止と損害賠償の請求だ。

しかし裁判で、フウジンブレードは非を認めなかった。フウジンWP1は日本全国に取り付けられているヒット商品だ。もしあなたがたの主張が正しいのなら、被害者はもっと多いはずだ。購入者のほとんどが何の異常も感じていないのだから、あなたがたの悩みは、決してフウジンWP1が原因ではないと。

公害問題の難しさが、ここにある。低周波騒音は、特にそうだ。なんとといっても、個人差が大きい。絵麻のようにフウジンWP1のすぐ傍で暮らしていても、何も感じない人がいるのだ。おまけにアレルギーのように、原因から離れば症状がなくなるものでもない。事実、絵麻は職場や外出先でも偏頭痛に悩まされ続けている。医学的な立証が非常に難しい。

フウジンブレードはそこにつけ込んだ。そもそも、原告たちの症状は、医学的に疾病と呼べるものなのか。ただの気のせいではないのか。万が一本当に疾病であったとしても、フウジンWP1が原因

だというのなら、それを証明してみると。一番はまだ結審していないが、弁護士の口ぶりや表情を見るかぎり、あまりいい方向には進んでいないようだった。

「バカな」

被害者の会の会合で、江角が吐き捨てた。

「俺たちはこんなに苦しんでいるのに、フウジンブレードの経営陣は温々と暮らしている。裁判所は、それを認めるといえるのか？」

江角は、会合の際にはいつも一人息子の遺影をテーブルに載せていた。

江角の息子は、高校受験を控えていた。学費のかかる私立高校が第一志望だったから、江角と妻は学費を工面するために色々と工夫した。

そのひとつが、家庭用風力発電機の設置だった。カタログによると、初期投資はすぐに回収できる。そこから先は電気代が節約できる一方だ。江角はフウジンW P 1を購入した。そして三階のベランダに取り付けた。息子の部屋の真ん前に。狭い土地に無理やり立てた三階の一戸建てだったから、風が通るのがその場所しかなかったのだ。

息子の成績が落ち始めたのは、それからだった。頭痛がすると言いだし、学校や学習塾を休みがちになった。原因がわからない両親

は、息子の異変を受験ノイローゼだと考えた。一過性のもので、すぐに元に戻るだろうと高を括っていた。むしろ、成績が上がらない息子にハッパをかけた。息子が校舎の屋上から飛び降りたのは、三カ月後だった。

「あいつらの顔を見るかぎり」沙月が低い声で応えた。「身に覚えがないって感じじゃないね。訴えられることを予想して、前もって準備してきたのが見え見えだわ」

沙月の場合、フウジンWP1を購入して設置したのは、七つ年上の夫だった。沙月は絵麻と違って、比較的早めに体調不良の原因に見当を付けていた。

しかし、それが間違いの元だった。年齢差から常に主導権を取っていた夫は、自分の行為を責められたと思ったのか、逆に妻を責め立てた。同じ屋根の下で暮らしている自分が何ともないのだから、風力発電機が原因であるはずがない。すべてはお前の精神的なものだと。そんなことだから、未だに子供ができないのだと。

夫の言葉に、沙月の心は粉々に砕け散った。フウジンWP1が我が家に来て以来、沙月は生理不順に悩まされてきた。夫は自分が原因を作っておきながら、妻に責任を押しつけてしまった。あれほど優しくかった夫。しかしそれは年長者が見せる、王様の優しさに過ぎなかった。王様は臣民を愛するが、臣民が自分に弓を引いた途端、

虐殺に転じる。沙月は精神的に虐殺されてしまった。

どちらが捨てたかははっきりとしない。事実として二人は離婚の道を選び、どちらも慰謝料を請求しなかった。沙月は実家に身を寄せた。そして偏頭痛持ちでも務まるアルバイトを掛け持ちして、実家に生活費を入れていた。三十五年ローンで購入したマイホームは売りに出した。おかげで沙月はフウジンW P 1から逃れられた。しかし夫に傷つけられた精神は、そう簡単に回復しない。そのため、フウジンW P 1が近くになくても、沙月は偏頭痛に悩まされ続けていた。

絵麻はそつと雨森の様子を窺った。被害者の会では、フウジンブレードに対する罵詈雑言が飛び交うのが常だった。そんな中、雨森だけは汚い言葉を吐かず、実務に徹した発言を心がけているようだ。そんな彼が裁判に負けそうだと知ったときに、態度を変えるだろうか。

「うまくないね」

抑制された口調で雨森は言った。

「僕たちを診てくれた医者は、診断書を出してくれた。でもフウジンブレードの奴らは、それ以上の健康サンプルを出してくる。やりにくいのは、奴らは僕たちを仲間割れさせることができるということだ」

「仲間割れ？」

絵麻と沙月が同時に反応した。会のメンバーを見回す。フウジンブレードという共通の敵を持って、被害者の会は結束している。仲間割れなど、起こしそうもない。絵麻は視線で説明を求めたが、雨森はすぐには答えなかった。数秒の逡巡の後、やはり変わらぬ口調で続けた。

「今言ったように、奴らの武器は、フウジンWP1の傍にいても体調を崩さない人間が数多くいることだ。それは、この中にもいる。たとえば江角さん」

雨森は猫背の中年男を見た。

「江角さんのお子さんは、フウジンWP1によって命を奪われた。しかし江角さんと奥さんは、何の変調も見られなかった。奴らは言うだろう。被害者の会といったって、被害を受けていない奴がいるじゃないかと」

「……………っ！」

江角が口を開いたが、言葉が出てこない。怒りが強すぎて、声帯を震わせることができないのだ。いや、それ以前に呼吸ができていない。江角は青黒い顔をして口をぱくぱくさせるだけだった。ひゅつと高い音を出して呼吸できたときには、気管に唾液が入ったのか、ひどく咳き込んだ。

「雨森さん」江角はようやく言葉を発することができた。「あんた、俺があいつらの攻撃材料になるっていうのか？」

「江角さんだけじゃない」

雨森は続いて黒髪の美女に視線を移した。

「沙月さんの元ご主人も、影響を受けなかった一人だ。今は離婚しているから、沙月さんの味方をしてくれるとは思えない。いや、ご主人に言及するまでもない。沙月さん自身が、フウジンWP1から離れても症状が続いている。奴らはその点を突っ込んでくるだろう。フウジンWP1から離れても続く症状なのだから、フウジンWP1が原因ではあり得ないと。健康被害は、個々の事情が大きく影響する。でも裁判官がそこまで考えてくれるかは、わからない」

沙月が両手で頭を押さえた。今まさに、偏頭痛が起きたかのように。雨森はため息をついた。

「こんなふうに、奴らは被害者の会をバラバラにすることを考えるかもしれない。僕たちには、今のところ有効な対抗策を打つ手立てがない」

雨森が口を閉ざすと、会議室は静けさに包まれた。罵詈雑言が飛び交うから、会場には防音性能が整った会議室を使っている。そのため、外からの音も聞こえない。会議室は、怒りと絶望が入り交じった固形物のような空気が支配していた。

沈黙を破ったのは、沙月だった。下を向いたまま、かすれ声で言った。

「……どうしようもないって、いうの？」

魂がすり切れるようなつぶやきを、絵麻は記者会見の映像を思い出しながら聴いていた。

——弊社製品には、何の問題もありません。

記者会見で、社長の中道はそう言った。大学教授の測定結果で、フウジンW P 1は問題になるような騒音は発していないという結果が出たと、自慢じまんげ気に発表したのだ。後に雨森が調べたところ、測定に関わった大学教授は、金をもらった相手の望む実験結果を出すことで有名な人物だった。

社長の中道もさることながら、被害者の会の感情を逆なでしたのが、専務の西山だった。

——いくらなら、納得するんですか？

嫌なにやにや笑いを浮かべながら、西山はそう言い切ったのだ。被害者の会は、金目当てで訴訟を起こした、たかりのような連中だ。マスコミにそうアピールする発言。最初はフウジンブレードを叩いていたマスコミも、次第に論調を変えてきた。科学的な立証が、何よりも大切だと。

被害者の会の立場が苦しくなるにつれ、会のメンバーは二つのグ

グループに分かれていった。ひとつは、あきらめて泣き寝入りを選ぶグループ。もうひとつは、あきらめきれないグループ。後者は、フウジンブレードに対する憎しみをより深くしたグループといい換えでもいい。絵麻はあきらめきれなかった。より先鋭的なメンバーたちと話をしていくうちに、自然と固まってきた意思があった。たとえ裁判に勝てなくても、いや、勝てないのならなおのこと、自分たちがフウジンブレードに鉄槌を下さなければならないと。

最もいいのは、フウジンブレードという会社そのものがなくなってしまうことだ。しかしそう簡単にはいかない。絵麻たちは、復讐ふくしゅうの対象を、より責任の重い三人に絞った。中道社長。被害者の会との折衝を担当した、西山専務。そしてフウジンWP1の開発責任者、ふえき 笛木開発部長。少なくともこの三人は、悪意を持って自分たちに被害をもたらした。ごく少数の先鋭化したメンバーたちは、私設法廷で判決を下した。死刑、と。

しかし、どうやって刑を執行すればいいのか。思い悩む絵麻たちの前に現れたのが、吉崎よしかだった。

「フウジンブレードなどという悪徳企業は、この世から消えてなくなるべきです」

消費者団体を主宰する男は、先鋭化した被害者の会に向かって、そう言った。自分たちは企業の横暴から消費者を守るために戦って

いるのだと。

最初のうちは、信用できなかった。彼らこそが、企業に因縁をつけて小金を巻き上げているのではないかと。あるいは、見境なく牙を剥いて歩く、迷惑な集団なのではないかと。

しかし違った。吉崎も、団体メンバーの亜麻音も、純粹な気持ちで消費者を守ろうとしていた。それだけに質が悪くともいえる。過激な活動をする環境保護団体が、世界的に問題になっている。吉崎たちはそんな連中に似ていた。

「消費者に被害を与える企業は罰せられるべきであり、そのためには手段を選ぶ必要はない」

吉崎はそう言い切った。私設法廷を設置した絵麻たちが、彼らと手を組まない理由はなかった。

それだけではない。吉崎は他にもフウジンブレードを恨む人間を見つけていた。

フウジンブレードで働いていたために、弟が過労自殺した花田千里。

父親の経営する製造所がフウジンブレードとの下請け契約を一方的に打ち切られたために倒産し、自身は大学を中退してフリーターにならざるを得なかった菊野時夫。

夫がフウジンブレード担当営業だったため、鬱状態に陥って会社

を辞めざるを得なくなった奥本瞳。おくもとひとみ

元々はフウジンWP1被害者の会から始まった復讐劇のはずなのに、会社そのものを恨んでいる人間がほぼ同数集まるところに、フウジンブレードの病根の深さが表れている。メンバーは、お互いの憎しみに共鳴し合うことよって、遵法意識を軽々と飛び越える殺意を心中に宿していった。

しかしこのメンバーだけでは、復讐は為しえない。最後のピースとして現れたのが、一橋創太そうただった。

彼は、かつてフウジンWP1の開発メンバーだった。そして開発途中から低周波騒音の可能性について社内の問題提起したのだ。発売時期を遅らせてでも、検証を行うべきだと。

「バカ野郎っ！」

提案した一橋に、上司の笛木は怒声を浴びせた。「今さら、発売を延期できるわけないだろうが！」

発売が延期になると、開発責任者の笛木が責任を追及される。保身のためにも、一橋の提案は却下せざるを得ない。そんな本音は見え透いていたが、一橋はさらにその奥も見抜いていた。検証を行うと、低周波騒音が検出されてしまうことを、笛木は知っていたのだ。

これはまずい。笛木の暴走を止めないと、会社は重大な問題を抱え込むことになる。

危機感を募らせた一橋は、なんとかして笛木に翻意ほんいしてもらおうと、懸命に説得を行った。しかし彼を待っていたのは、転属の辞令だった。

総務部総務課。それが一橋の新しい職場だ。聞こえはいいが、実際にはパソコンも電話も与えられず、ひたすら膨大な計算結果を検算する作業を押しつけられた。パソコンがないから、電卓を叩くしかない。そして計算ミスをチェックできなかった場合、一橋の責任にされる仕組みができあがっていた。仕組み作りには西山専務も荷担していたし、承認したのは中道社長だった。

つまり、みんなわかっていたのだ。フウジンWP1が、消費者被害を与える危険を抱えていることを。それでも危険性を隠蔽いんぺいして発売することを決断した。

まだ若い一橋が転職を決意するのに、時間はかからなかった。一橋はフウジンブレードよりもさらに小さなベンチャー企業に転職した。新しい環境で働きながらも、一橋の心から、フウジンブレードと笛木に対する憎しみが消えることはなかった。そんなとき、吉崎から声がかかったのだ。一緒に復讐ふさうしないかと。一橋は、誘いに乗った。

一橋が社内情報を提供し、それを元に吉崎が素案を練ねり、雨森が磨き上げる。ごく短期間にそのような作業を行い、メンバーは行動

を起こした。

時間をかけた水も漏らさぬ計画よりも、迅速じんそくさが必要だった。相手がこちらの計画に気づく前に、一気に決着をつける。裁判という公明正大なフィールドで行われている勝負。そう相手が思っている間こそが、決行のチャンスだった。

そして今日、絵麻たちは目的の三分の一を達成した。明日一日は無為に過ごすことになるけれど、その間に笛木の死が露見する心配はない。明後日あさって、五月五日こそが、今まで絵麻を悩ませ続けてきた偏頭痛から完全に解放される記念日となるのだ――。

電子音で目が覚めた。

手を伸ばしてスマートフォンを取る。液晶画面をタッチしてアラームを止めた。

午後六時十五分。うたた寝してしまったときのことを考えて、念のため集合時刻の十五分前にアラームをセットしておいたのが、役に立った。はじめて見る殺人に神経が興奮して眠れないだろうと思っていたのに、簡単に眠りに落ちていた。自分で思っていたよりも、神経が太いのだろうか。いや、違う。与えられた刺激が強すぎて、脳と神経が休息を欲していたのだ。

各自、自室で休息を取ることにしたのが、午後五時だった。一時間と少しの睡眠ということになる。足りない気もしたけれど、二度

寝るほどは眠くない。やや頭が重いものの、ずっとつきまとわれていた、起き抜けの偏頭痛もない。少し安心して、身を起こした。ユニットバスで水を飲んだ。鏡に向かって髪を直す。

ふと思いついて、室内を見回した。保養所の客室は、ホテルのツインルームと同じような造りだ。居室とユニットバスでできている。居室にはシングルベッドがふたつと、小さなテーブルと椅子が二脚ある。それとは別に、ちよつとした仕事ができるライティングスペースがあるのは、研修にも利用される保養所ゆえか。保養所には別に大浴場もあるけれど、子供がまだ小さい場合を考えて、家族だけで利用できるユニットバスがあるのかもしれない。

そういえば、ここしばらく旅行なんて行っていないな。

出張があるような職種じゃない。はるか昔、恋人がいた頃には一緒に旅行も行ったけれど、別れてもう何年も経つ。新しい相手を見つける前にフウジンWP1の被害に遭ったから、旅行どころではなかった。

今回は人生をかけた大勝負だから、旅行という雰囲気ではない。しかし成功した暁あかつきには、祝勝会を兼ねた旅行を企画してもいいのではないか。メンバーはそれぞれに憎しみを抱えているから、どうしても暗くなりがちだ。でも復讐を果たしたのなら、みんな明るさを取り戻すのではないか。先ほど沙月が吐露した本音。復讐はスッ

キリする。全員が同じ気持ちになれば、さぞかし明るい旅行になるだろう。

あるいは、祝勝旅行は実現しないかもしれない。自分たちは、フウジンブレードへの恨みでつながっている。復讐を遂げ^としまえば、自分たちを結びつけるものは何もなくなってしまう。ごく自然に解散して、二度と会うことはないかもしれない。

それでも、今回の作戦を完遂^{かんすい}できたら旅行に行くというアイデアは、捨てがたいものに思えた。なに、全員で行く必要はない。たとえば、千里とはウマが合う。彼女との旅行は楽しいだろう。雨森や一橋も、被害者である自分に酔っていない。男性と二人きりというのは抵抗があるけれど、小グループでなら可能性はある。

いけない。

絵麻は頭を振った。まだ一人を殺しただけだ。残る二人を殺さないうちは、何も成し遂げていないのと同じだ。旅行なんて、三人殺してから考えればいい。自分が企画しなくても、吉崎と亜麻音が勝手に旅行会社のパンフレットを持ってくるかもしれないし。

八分前だ。そろそろ食堂に戻ろう。

ドアを開けたら、奥の方に人の気配がした。反射的に視線を向けると、雨森が六号室の鍵をかけているところだった。雨森もまた、ドアが開く音に反応したのか、こちらを見た。小さく笑って近づい

てくる。

「お疲れさま」

絵麻も「お疲れさま」と返す。「眠れた？」

雨森は、食堂を出るときに眠ると言っていた。起きてこなかったら起こしてとまで言っていた。

「いや」雨森は小さく首を振った。「明日の過ごし方を考えていたら、いつの間にか時間が過ぎてた」

「過ごし方って？」

絵麻の質問に、雨森は苦笑で答えた。

「だって、明日一日は何もやることがないんだよ。明後日の朝には中道と西山を退治するというのに、のんびりテレビを見たりゲームをしたりできるとは思えない。でも、ただじっとしているには、一日は長い」

なるほど。そこまでは考えなかった。

「考えなくても、いいんじゃないの？　まずは、目の前の晩御飯を準備しようよ」

雨森は瞬まばたきした。「それもそうだ」

笛木に調べさせた予定表から、五月五日の早朝まで保養所に潜伏せんぷくする可能性があった。そこで車で三十分ほど走ったところにある業務用スーパーマーケットで、食料を買い込んだ。十人分の四食分、

あるいは五食分だからけっこうな量になったけれど、業務用スーパーマーケットだから、それほど印象に残っていないはずだ。ゴールデンウィークの最中だからか、バーベキュー用の肉や野菜を大量に買い込む集団は、何組もいたし。

「とりあえず今晚は、中華だね」

雨森が記憶を辿りながら言った。

献立は、主婦経験のある瞳と沙月が中心になって考えた。今日の夕食は勢いをつける意味で、ニンニクと唐辛子、それから花椒が効いた麻婆豆腐だ。他には、ワカメを中心にした中華風サラダと、卵スープ。米は保養所の備蓄を失敬することにした。男性陣は酒と肴選びに夢中だったから、あてにはしていない。女性はいつも現実的だ。腹が減っては戦ができない。

「しまった」

声に出してしまった。雨森が目を丸くする。

「何？」

「ごはん。炊飯器の準備をしてない。休憩の前に、米を洗って吸水させておけばよかった」

「ああ、そうか」

自分も自炊しているのか、すぐに思い至ったようだ。頭を掻く。

「メンバーには主婦や自炊している独身者があれだけいたのに、誰

も気づかなかったとはね。やっぱり、殺人計画遂行中という異常事態が、生活感覚を鈍らせてたんだろうな」

「まあ、いいよ。無理に吸水させなくても、ぎざっと洗ってすぐに炊飯しても、それほど変な味にはならないから。ごはんもさることながら、麻婆豆腐に使う挽肉ひき肉を冷蔵庫から出そうよ」

雨森が軽く首を傾げた。本当に意味がわからなかったときの仕草。「肉料理の基本は、肉を室温に戻してから調理することだよ。こっちも、休憩の前に冷蔵庫から出しておくんだった」

「そうなんだ」いつも淡々と話す青年が、妙に感心した声を出した。たいした話ではないから、あまり感心されると、こちらが恥はずかしくなる。

「まあ、日々の生活に追われてると、わかっていてもなかなかできないんだけどね。料理のコツの中で、最も実践しにくいことかもしれない」

「そうだね。朝、出勤前に冷蔵庫から出したりしたら、夏場なんか帰ってくる頃には傷んでいるかもしれない」

「そういうこと。今日なんて挽肉を一キロも使うんだから、なかなか戻らない」

本来なら、潜伏先での料理に、それほどこだわる必要もない。だけど雨森が指摘したように、他にやることがない。だったらせめて

食事くらいはいいものを食べたいではないか。

階段を降りて、食堂に向かう。食堂は真っ暗だった。出入口付近を探したら、照明のスイッチが三つあった。三つともオンにすると、広い食堂はすぐに明るくなった。十二卓あるテーブルのうち、四つをつなげたそのままの状態だ。

その最奥で、一橋がテーブルに突っ伏した格好のままにいる。

「よく眠ってるね」

雨森が小声で言い、絵麻が首肯した。

「眠剤がよく効いているみたいね。普段服用してないと、劇的に効くからね。ひよつとしたら、明日の朝まで起きないかもしれない」

「本人も言ってたけど、気が抜けたのもあるだろう」

雨森が共感を滲ませながらコメントした。

「一橋さんの憎悪は、主に笛木に向けられていた。一橋さんを追い出したことに関しては、社長の中道と専務の西山も関与していたそうだけれど、やはり普段接点のない取締役と、直属の上司とは違う。フウジンWP1の件がなくても、普段からパワーハラメントの常習者だったそうだから、一橋さんにとっては笛木こそが真のターゲットだ。殺したら気が抜けるのも無理はない」

「そうね。行動を起こすのは明後日の朝だし、一橋さんはこの保養所で西山を待つ役目なんだから。極端な話、三十六時間眠っていて

も、問題ないでしょ」

「それは、本当に極端だな」

二人で笑った。しかし絵麻は、すぐに気持ちを切り替えた。

「ともかく、キッチンに行こう。確か、炊飯器は大きいのと小さいのがあった。利用者の人数で調整できるようにしてるんでしょう。」

今日の利用客は十人もいるから、大きい方を使わなきゃ」

「十合炊きなんて、大学の合宿以来だよ」

雨森が遠くを見ながらコメントした。

大学の合宿。雨森は学生時代、どんなサークルに入っていたんだろうか。

現在の体格を見ているかぎり、体育会系というわけでもなさそうなんだけど。とはいえ別に運動部でなくても、自炊するサークルは珍しくない。

飄々とした物腰からは、大学時代に打ち込んでいたものを想像するのは難しい。ただひとついえるのは、当時はまさか自分が将来殺人に手を染めるとは、夢にも思っていなかったということだ。

料理の段取りを話しながら、食堂の奥に向かう。ふと思いついたことがあって、一橋の手前で足を止めた。一瞬遅れて、雨森も立ち止まる。

「どうしたの？」

「一橋さん」

絵麻は答えた。「考えてみたら、部屋に運ばないまでも、毛布くらい掛けてあげた方が良かったかもしれないと思って」

「——ああ」またしても一瞬遅れて、雨森が反応した。

「空調が効いているから大丈夫と思うけど、言われてみれば設定温度は起きている人間向けだ。仲間としては、薄情すぎたかもしれないな」

「今からでも毛布を取ってこようか」

二人は突っ伏した一橋に目をやった。どうだろう。寝苦しそうだろうか。

一橋はぴくりとも動かなかった。熟睡できているのなら、毛布は必要ないか。そう思いかけた脳を、強烈な違和感が襲った。

なんだ？

これは、なんの違和感だ。必ずしもはっきりしているとはいえない頭で、懸命に正体を探した。わからない。

先に見つけたのは、雨森だった。

「これ……」

彼らしくない、緊張を含んだ声。

「一橋さんの、首」

首？

自然と一橋の首に視線が向く。テーブルに突っ伏した体勢だから、首は見えづらい。いや、雨森の言葉は正確ではない。

首じゃない。後頭部と首の中間点だ。いわゆる盆ぼんの窪くぼと呼ばれる場所。そこが、先ほどまでの一橋と違っていた。

一橋の盆の窪から、アイスピックの柄えが生はえていた。

へつづく